

RET転座肺癌の臨床病理像の解明

関西医科大学提供
作成日 2016年3月10日
更新日



研究者氏名 つた こうじ 葛 幸治	所属機関 関西医科大学病態検査学講座	関連キーワード（複数可） 病理診断 肺腫瘍
主な研究テーマ ・肺腫瘍の外科病理		主な採択課題 ・若手研究(B)平成19年度（配分総額:3,400千円） 課題名「非小細胞肺癌における微小検体を用いた分子標的治療薬の効果予測因子の解析」 ・基盤研究(C)平成25～27年度（配分総額:3,900千円） 課題名「KIF5B-RET転座陽性肺癌症例の臨床病理像の解析」

科研費による研究成果

・肺腫瘍には治療ターゲットとなる複数の遺伝子異常が存在することが明らかとなり、迅速且つ適切にそれらの遺伝子異常を有する症例を識別する必要がある。RET転座陽性肺癌症例の臨床病理像を明らかにすることで症例選別の参考データを供給することが本研究の目的である。

非小細胞肺癌1874例を蛍光色素を用いたFISH法またはRT-PCR法を用いることでRET転座肺癌を同定した。

RET転座を有する肺がんは22例(1.2%)に見いだされた。これらの組織型は全て腺癌であった。

臨床的に、RET転座を有する患者は若年発症で、非喫煙者に多い傾向が認められたが、性差は認めず、腫瘍径やステージ、予後との相関を認めなかった。

組織学的に有意な増殖形態は乳頭状増殖であったが、特徴的な組織像を明らかに出来なかった。

当初予定していなかった意外な展開

転座によりRETタンパクが活性化されることから免疫染色がスクリーニングに有用と考えられたが、RET転座例の71%のみに陽性とならなかったためにスクリーニングとしてはALKの様には使えないことが明らかとなった。

FISH分離プローブは感度は良いが特異性が完全ではなく、転座パートナーであるKIF5BやCCDC6の分離プローブの2種類を併用するのが望ましいことが明らかとなった。

③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

現在、我々のデザインしたFISHプローブを用いて前向き臨床試験が行われており結果が期待される。

本研究のデータは肺癌個別化医療の症例選択において貴重な情報と考えられる。